

国語教育相談室

小学校
no.
81

光村図書

特集

言語活動を支えるコミュニケーション力

鼎談

高木まさき・森山卓郎・邑上裕子

インタビュー

鴻上尚史

わたし
ことば

鬼才の普通

いとうせいこう

書写

デジタル教科書の
活用



光村図書

ロゴマークについて → www.mitsumura-tosho.co.jp/company/logo

「つながる かざぐるま」

今年、光村図書は創立65周年を迎えます。
昭和25年に小学校国語「かざぐるま」読本を
刊行してから今日まで、
教科書や教材、書籍をつくり続けてきました。
このたび、会社の原点ともいえる
「かざぐるま」の羽をモチーフにした
シンボルマークを制定いたしました。
これからも、原点を忘れずに、
子どもたちへ、先生方へ、
私たちができることを考えてまいります。

小学校 国語教育相談室 通巻No.157 2014(平成26)年1月24日発行 定価126円(税込)
発行人=常田 寛 発行所=光村図書出版株式会社 東京都品川区上大崎 2-19-9 〒141-8675 電話 03-3493-2111
www.mitsumura-tosho.co.jp E-mail:koho@mitsumura-tosho.co.jp 印刷所=協和オフセット印刷株式会社 デザイン=mg okada

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に則り、適切な管理・保護に努めてまいります。詳しくは、光村図書ホームページをご覧ください。
www.mitsumura-tosho.co.jp 広報誌の配送停止をご希望の方は、光村図書出版までご連絡ください。

鬼才の普通

秋山道男という大先輩がいて、もともとアンゲラ世界で名をはせたのだが、やがて超モダンな雑誌を作るかと思えば、チエツカーズの総合プロデュースなども行い、どちらが表でどちらが裏がよくわからない活躍を繰り返してきた人物なのだった。

その秋山さんがある時、といってもずいぶん前で四半世紀は経っているだろうと思うが、「いうくんは事務所とか入ってるの？」と急に言い出したのである。私が出版社をやめて何年かしてからのことだった。秋山さんと一緒にいる機会は色々と多かったから、私が自分で事務所を作ったことなどどつくに知っているだろうと思い、意外に思った。

秋山さんはそれまでもそれからもしたことのないマジメな顔をしていた。こう言った。

「マネージャーを大事にしろよ」

まったくもって普通の言葉であった。どんな時

でも変わったことを言い出す、もしくは変わった表現で言う。秋山さんはそういう人だったから、私はあつけにとられた。

すると、大先輩はかまわず続けた。

「だいたい売れてくると裏方の苦労を忘れて自分でもなんでも出来ると思っちゃうんだよ。周囲に支えられて好きなこと出来てるってことを忘れる。それが結果、クリエーターの活動をせばめる。だからマネージャーを大事にすること」

私はたぶん、やはり普通に「はい」とだけ答えたのではないだろうか。自分でも裏方をねぎらう気持ちには強い方だと思っていたが、天下の秋山道男がわざわざマジメに言い出すとなれば肝に銘じるべきなのである。

おそらくそれからこっち、私は何か裏方に不満があっても一度自分に非がないか考える。突飛なことをするためには、周囲に地道なスタッフがいなければならぬ。陰陽どちらも押さえておかねば、世界に関与が出来ない。

鬼才が普通を恐れなかったあの数分、いわば鬼才が私ごときのために裏方代表になってくれた時間を、私は大事にしたいと思っている。



1961年、東京都生まれ。早稲田大学卒業後、出版社の編集を経て、コラムニスト、小説家、演出家、ラッパー、MCなどとして多方面で活躍。1988年、小説『ノーライフキング』でデビュー。1999年『ボタニカルライフ』で講談社エッセイ賞、2013年『想像ラジオ』で野間文芸新人賞受賞。他に『ゴドーは待たれながら』（戯曲）、『文芸漫談』（奥泉光との共著、後に文庫化にあたり『小説の聖典』と改題）、『存在しない小説』など著書多数。

CONTENTS

わたしとことば 鬼才の普通 いうせいこう

特集 02 言語活動を支える コミュニケーション力

鼎談 言語活動は、協働的な学び 高木まさき×森山卓郎×邑上裕子
インタビュー コミュニケーションのレッスン 鴻上尚史

14 コラム 新しい教科書が教室に届くまで

その悩み、解決
します！ 6 18 「コミュニケーションコラム」の活用 達富洋二・吉永幸司

教材研究のススメ 8 22 並行読書を活用した「ウナギのなぞを追って」(4年下) 興水かおり

子どもたちを
「書写好き」に 2 26 デジタル教科書の活用 藤井浩治

今、教育の重要なキーワードとなっている「言語活動の充実」はコミュニケーションの力と深い関わりがあります。両者がどう関わり、その力をどう育てていけばよいのか、鼎談・インタビューで取り上げながら、これからの教科書の方角性を考えていきたいと思います。



言語活動を支える コミュニケーション力

イラスト：後藤美月 撮影：鈴木俊介

鼎談

言語活動は、 協働的な学び

横浜国立大学教授 高木まさき

早稲田大学教授 森山卓郎

明星大学 特任准教授 邑上裕子

子どもたちの

コミュニケーションの現在

言語活動を支えるコミュニケーションの力、その育成に必要なこと。それから、次の教科書で実現したいことについて、三人の編集委員の先生方に語り合っていました。



高木 ここ十年ほどで、大学生のコミュニケーションのあり方が大きく変わった感じがします。昔は、四年生が自然と三年生の面倒をみていた。でも、今は指導しないと、お互いに深く交わらない。人前で話すことが上手な学生は多いのですが、それが人と人とのコミュニケーションにつながっていないのかもしれない。型や知識・技能は身につけていても、思考力やコミュニケーション力には課題があるように思います。

邑上 形としては成り立っていても、「通じ合ってよかった」というコミュニケーションにはなっていないんですね。





言葉を用いた活動は、 常に相手との 相互作用の中で 行われるもの。



たか き
高木まさき

静岡県生まれ。横浜国立大学 教授。同大学教育人間科学部長。中央教育審議会国語専門部会委員、学習指導要領の改善協力者、「全国的な学力調査の在り方等の検討に関する専門家会議」委員、「言語活動の充実に関する指導事例集」作成協力者など。著書に『「他者」を発見する国語の授業』（大修館書店）ほか。光村図書 小学校・中学校「国語」教科書編集委員を務める。

だと思っています。ただ、子どもたちが本当に自分の頭で考えてその言語活動に参加しているのか、疑問に思える授業も目にします。**高木** 同感です。言語活動の取り組み方には三パターンあると思っています。一つ目は、ただ活動をさせるだけ。二つ目は、知識・技能を教えて活動をさせるもの。そして、三つ目は、それを通して思考力を身に付けさせることができるもの。残念ながら、現場では、一つ目、二つ目の授業が多いような気がします。

森山 「し合う」言語活動を充実させるには、そのもととなる自分の考えをしっかりともてるような、一人一人の力が耕しが不可欠でしょうね。同時に、その一人一人の考えの違いを大事にできることも必要です。そうでないと、「し合う」ことが本当には生きてきません。

森山 「場性」や文脈が大事なんです。高木 抽象的に何かを正しく伝えるのではなく、具体的な相手に向けて何が必要かを考えることで、論理的な文章や話が形成されるということです。論理は、文脈や状況、

森山 三年前まで幼稚園の園長を務めており、こんな光景を目にしました。うちの園ではないのですが、ある子がブランコに乗っていたところに、別の子がやって来た。その子はブランコに乗りたかったようで、「（順番を）カーワッテ。カーワッテ」と、壊れたレコードのように繰り返すだけで、ブランコに乗っているほうの子は知らんぷり。

森山 言葉が届いていない。**森山** そう。言葉を発してはいても、全く血の通ったものになっていないんですね。異年齢で遊ぶことが少ない、大人の監視下でけんかなどを起こさないようにしているなど、人と関わるたくましさのようなものが薄れている気がします。

森山 変化は、幼児教育段階から出てきているのかもしれないね。**高木** 変化は、幼児教育段階から出てきているのかもしれないね。**森山** 私のも昨年の三月まで、小学校長と兼務で、幼稚園長をしていました。人前でのパフォーマンスは上手だけど、自分の言葉で説明することが苦手な子が増えているように感じます。

森山 借り物ではない、「我が物」としての、実際の生活で伝え合うためのコミュニケーション力の重要性を強く感じます。

森山 文化が違ふ子が、相当増えてきています。そのような子どもたちへの手立てについて、教師もまだ不得手なところがあるのかなと思います。

「し合う」という協働性

森山 平成十年告示の学習指導要領と現行のものとで、「国語」の中に「し合う」という表現がいくつ使われているか調べたことがあるんです。平成十年では九か所、現行では二十四か所でした。ここに、「みんなで学ぶ」という意識が見て取れるのではないのでしょうか。ですから、「し合う」という言語活動を大切にするのはよいこと





話し合いとは、 自分の頭で考えて、 協働的に論理を 形成すること。



もり やま たく ろう
森山卓郎

京都府生まれ。京都教育大学教授を経て、早稲田大学 教授。博士(学術)。主な著書に『ここからはじまる日本語文法』(ひつじ書房)、『日本語・国語の話題ネタ 実は知りたかった日本語のあれこれ』(同)、『日本語の〈書き〉方』(岩波書店)、『国語教育の新常識』(共著・明治図書)など。光村図書 小学校・中学校『国語』教科書編集委員を務める。

相手や目的に照らし合わせることで力を発揮する。論理だけに限らず、言葉を用いた活動は全て同じです。常に相互作用のなかで行われる。ですから、お互いにさまざまな違いを出し合いながら学習していくことに意味があります。こういった学びの協働性が重視されていることも、言語活動の充実が求められる理由の一つではないでしょうか。

「話す・聞く」の 学習とつづ

邑上 私が長年、実践や研究に取り組んできた「話すこと・聞くこと」の学習でも、



大きなことです。瞬時に替わる聞き手と話し手を育てることを、大事にしているのだからうと受け止めています。

森山 確かに、態度だけでは不十分です。実際に話し合いを深めるための言葉を、発言のいわばフレーム作りの手立てとして獲

得させるという指導も考えられますね。「なるほど」「そうすると」「でも」など、話し合いで大切な、相手の話を受けて、自分なりの思考を展開させるような言葉です。先ほど、高木先生がおっしゃっていたように、一人一人に思考力を身につけさせ、教室のみんなが必ず考えないといけない授業作りが望まれるように思います。

高木 そうですね。話し合いには、話を「受け止めて掛け合う」ような力が必要なんです。ですから、知識・技能として、「そうは言っても」という言葉を知っていて使えれば、逆接的に返すことができる。思考を引き出す言葉を身につけておくのは大切です。ただ、それだけでは足りないと思うんです。相手の話したことについて知識や興味が全くなければ、「そうですね」としか返せない場合もあるでしょう。ある程度、共通の土台があれば、掛け合いにはならない。土台となる、問題意識や知識などを同時に育てることも課題です。そして合わせて、「話し合うよさ」が実感できる経験を積み重ねていけるといい。それが、日常に生きる力につながるのではないのでしょうか。

森山 それは大切ですね。「話す・聞く」の学習として、型は重要な部分ではありません

相手・目的の意識は大切なことです。「話す・聞く」に関しては、声の出し方・話し方・聞き方など、型の指導はかなりされていますが、それが「話し合う」「つまり話し合い」につながっていないんですね。

話し合いでは、聞き手と話し手の立場が瞬時に替わり、自分が聞いたことに絡ませて、話をしなければならぬ。ですから、型を教えるだけでなく、よい聞き手・話し手を育てるという意識を、教師はもつようにしたいものです。

前の学習指導要領では、「話す・聞く」の目標には、「話し合おうとする態度」と掲げられていました。改訂後、それが「話し合う能力」という言葉になった。これは

すが、それが本質になってしまうのはよくない。相手の話の内容についての知識がなくとも、自分が、違うことについて考えた経験があれば、「どうして」「それはどういうこと」と返すことができるはず。自分の頭で考えて、協働的・対話的に論理を形成する。それを育てるのが、単なる型ではない、本当の話し合いなのではないでしょうか。

高木 自分が知らないことについても、一歩踏み出してある程度考えて、話を関係づけたら広げたりする。そういう思考力を大事にしていかなければなりませんね。

邑上 全く同感です。

森山 みんながしつかり発言できるという力の耕しと、それからもう一つ、活動のリアリティも必要かもしれません。つまり、その言語活動に「本当に何かのために主体的に考えるんだ」と切実感をもって取り組めること。そうでないと深まりませんし、「やってよかった」という実感も得られません。邑上先生、実際の指導としては、うまくできない子にはどのような手立てが考えられますか。

邑上 悩ましい問題ですが……私は、「みんなが経験する」ということは小学校教育でとても大事だと考えているんですね。で

すから、話し合いでは、司会などの役割を、どの子にも必ず経験させることがまず必要です。それから、型は教えますが、それが自分なりの型や言葉に発展していくといいなと思います。「僕は〇〇さんの意見に賛成です」ではない、その子なりの生きた言葉が出てくるはずなんです。さまざまになぎ言葉を出し合わせて、「〇年〇組のつなぎ言葉」を作ってもいいですね。

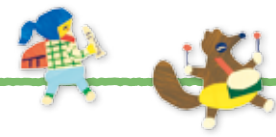
森山 それは、子どもたちから出てきたものを、生き生きとしたモデルとして、お互いに学び合うということですね。

邑上 時間数が足りなくて、なかなか話し合いが深められないのが現実ですが、「答えを出す」ことよりも、「二人一人が考えをもち合って、つなげ合いながら交流すること」を重視できればと思います。

「活用できる教科書」 に向けて



高木 モデルという点では、自分自身、実感していることがあります。学生時代、卒論を書くために、恩師の先生の本を読みあさったのですが、そうすると、だんだん先



生の考え方が乗り移ってくるんですよね。違う研究テーマでも、「先生だったら、この事象を前にしたらこう考えるはず」と考える。今でもそうです。それは引用ではなく、考え方が自分の中にあるということ。

考える、つまり物事をどう関係づけるかということとは、「自分の中にどれだけモデルをもっているか」によるものだろうと思います。いくつものモデルを融合させて、自分のものにしていく。学生たちを見てみると、それがないんだろうと思うんです。読むことを通してそうしたモデルを獲得してきていないのでしょうか。今、インターネットで膨大な情報が手に入ります。しかし、重要なのは情報ではなく、その結論に至るまでの考えの道筋。考え方のモデルなんだと考えています。

邑上 教科書でいえば、主に説明的な文章が果たす役割が大きいのでしょうか。

高木 そう。教科書では、筆者一人一人のものの見方・考え方が表れているような、個性ある文章が掲載されているように思います。これは非常にいいことで、今後も続けていきたい。考えの道筋に、多く触れるのは重要ですからね。それが、コミュニケーションの土台作りとなるはずです。その意

味で、授業では、説明的な文章、特に資料として位置づけられているものをもっと生かすという視点が必要な気がします。

邑上 「手と心で読む」(四年上)、「平和のとりでを築く」(六年)のようなものですね。

高木 ええ。ものの見方・考え方は表現のしかたに表れる。授業では、活動のための話題提示としてだけではなく、考えのモデルに触れるような読み方をしてもらえたらと思います。

森山 他の説明的な文章も、論理と具体的な表現の方法を押さえるように学習してもらえればいいですね。新版の教科書では、さらに、豊かな文章を数多く用意していく必要がある。そうすれば、文章をもっと生かされますし、他教科でも使える力となります。

邑上 賛成です。題材や使われている言葉に興味をもって読むことも否定しませんし、大事なことです。ただ、せっかくですから、授業では、書きぶりから考えのモデルを学ぶというところまでもっていつてもらいたいと思います。

高木 それから、「書くこと」では、作例に示された、書くときの観点に立ち止まってもらいたいですね。これも、ものの見方・

考え方の一つ。子どもたちが多くのモデルを身につけられるよう、新版でも観点を充実させたい。

邑上 少し視点を変えて、子どもたちが見通しをもって学習に臨み、身につけたことを自覚できるというのも、一人一人の力の耕しには重要です。その際、今の教科書の「話す・聞く」「書く」単元の冒頭にある「活動の流れ」というチャートが役立ちます。教師が見通しをもつための示唆にもなりますね。現場でも、「使いやすい」という声をよく聞きます。

高木 自分のしていることを客観的に捉えて認識する、そういう「メタ認知」の力は思考力と強く結び付いています。その点において、活動の流れを視覚的に認識し、イメージしながら段取りを組んで取り組むというのは大切なことですね。振り返りにも使えます。

邑上 活動の大きな流れとともに、特にどの部分がポイントになるのか分かるように、もう少し踏み込んで示してもいいかもしれません。そうすれば、子どもたちが自分为主体的に学習を進めていきます。

森山 学習内容の焦点化にもつながることですね。教師が指導するときにもその意識

があれば、子どもたちを適切に評価し、できない子への手立てを考えることがしやすくなります。

高木 例えば、スピーチは、話題設定や取材、構成、話すことなど、さまざまな要素の集積の上に成り立つこと。スピーチのどの要素が弱いのかは、その子によって違うはずです。多様な子どもたちがいるなかで、一人一人の状況を把握しなければならぬわけですから、一つの言語活動を分割・分析する目をもち、どの要素に焦点化して指導するか考えるのは重要なことです。

森山 そうして、一人一人の思考力やコミュニケーションの力を耕し、ともに「し合う」学習を通してみんなが高まっている

ければ、それは素晴らしいことです。そのために活用できるように、新版ではさまざまな工夫をしていきたい。先生方にはぜひ期待していただきたいですね。

邑上 みんなでいいところを引き出しながら、共有して高め合っていく。それが協働的な学びです。新版の教科書がどんな提案をしているか、楽しみにしてもらえたらと思います。

森山 教科書の活用と合わせて、子どもたちのなかから、よいモデルをどんどん取り上げて、褒めてもらいたいです。教師が褒めるという、温かい励ましの力を発揮していけるといいですね。

高木 本心に。大人だって褒められるとう

れいなんですものね。それは、教科書が新しくなっても、変わらずに大切なことです。先生方の授業の力あってこそその教科書です。新版はより活用できる教科書を目指していきますから、授業で使っていたくのが今から楽しみです。



むら かみ ゆう こ
邑上裕子

東京都生まれ。小学校教諭、立川市教育委員会指導主事、東京都教職員研修センター統括指導主事等を経て、明星大学 特任准教授。元東京都小学校国語教育研究会会長。共著に『小学校 国語学習指導実践事典』(東洋館出版社)、『未来に生きる話し手・聞き手を育てる「話し言葉」の学習』(光村図書出版) など。



一人一人が考えをもち、 つなげ合い、交流することを 重視して。



コミュニケーション
のレッスン

演出家として多くの人と関わってこられた鴻上尚史さんに、コミュニケーションで大切にしたいこと、教室の雰囲気作りのためにできることについてうかがいました。

私とあなたは違う

——教室でみんなが学ぶとき、コミュニケーションの力として大切なのはどんなことでしょうか。

日本では、話し合いの目的として「みんなが一つになる」ことを求めがちですが、私も僕も、大事なものは、「私とあなたはどれくらい違うか」を明確にすることだと思っています。それが、話し合い、つまりコミュニケーションの目的なんです。

違いが明確になれば、「ここまでは一緒にできる」「ここから先は意見が違うから無理に同じ行動は取らない」ということが見えてくる。折り合いがつけられるということです。いちばんよくないのは、なんとなく曖昧に一致している、みんな従っているという状態。そこにはコミュニケーションは存在しません。

——小学生にもある程度は求めていけるのでしょうか。

やはり、先生が導かなければいけないでしょうね。大切なのは、話し合いの意義をどう示すのかということ。お互いの考えの違いを明確にするための、みんなが考えの違いを乗り越えて一つになるための、か。

コミュニケーションって、「自分とは違う人」とどう折り合いをつけていくかということ。僕とあなたは違うけれど、それは当たり前。そのうえで、なぜ違うのか、その違いについてお互いどう考えているのかを明確にすること。違う者同士が、なんとか一緒にやっていくとするためのものなんです。

だから、まずは、「多数決がそのクラスの意味」という考え方、「反対の人がいるならやめる」という捨てぜりふはやめましょうと言いたい。そして、そうなるように、先生が導いてあげてほしいですね。

失敗しても大丈夫な
雰囲気作り

——折り合いをつけるには、「場」の雰囲気作りも必要になってきそうです。

そうですね。「この人たちは自分の話を聞いてくれるし、自分もこの人たちの話を聞ける」という関係性さえ生まれれば、場ができあがると思っています。例えば、演劇でいうと、演出家が最初にすべき仕事は、試行錯誤ができる、失敗しても大丈夫な稽古場の雰囲気作りなんです。創作のための試みには、当然、失敗がつきもの。だから、失敗することが楽にできる場所を作れたら、稽古の半分以上は成功したと思って間違いない。

自分の意見を聞いてもらえず、ただ誰かの意見に従わなければならないとしたら、それはコミュニケーションの場として不十分です。みんなが、お互いの意見を聞く場を作らなければ。授業の時間が限られてい

コミュニケーションとは、自分とは違う人と

折り合いをつけていくこと。

るから大変でしょうけれど、できるかぎり、先生が子どもたちの提案を聞いたり、子どもたちが試行錯誤したりできる時間が取れるといいですね。本当に、お互いの意見を聞くことがいちばん大事なんです。

——リラックスした場であることも重要ですね。

そう。でも、リラックスしようと思うと、余計に身体がこわばることが多いんですよ。大事なのは、自分の身体がこわばっているときにそれを自覚することです。身体が発するメッセージは、どんな言葉よりも強い。言葉でどんなに親しげに話しかけられても、相手の身体がこわばっていたら、こちらはリラックスできません。身体がこわばっていると、自分も思うように話せないし、相手も話してくれないんです。人間、そこはすごく敏感です。

だから、教室では、まず先生がリラックスして楽に授業を始めることを覚えて、それを実践していくことです。子どもたちは、先生をよく見ていて、影響も受けます。先生のリラックスは自然と、子どもたちにも波及します。僕は、教壇って、舞台だと思ふんです。教壇に立つとき、先生には、自

分に魔法の粉をかけて、軽くほほ笑むような精神状態でいてもらいたいですね。

アイスブレイク

――授業で取り入れることができるような、緊張をほぐす手法はありますか。

演劇のワークショップでは、参加者の緊張を解きほぐすために、「アイスブレイク」という手法を取り入れます。具体的には、簡単なゲームなどを通して、一人一人の身体のコババリを和らげ、声や身体で表現する準備、失敗しやすい雰囲気作りをします。アイスブレイクでいちばん大事なものは、とにかくリーダーが楽しみ、周りが楽しみ、楽しく始まり楽しく終わること。だから、始める前には必ず、「これは遊びであって、お互いの緊張をほぐすためにするんだ」ということを楽しく参加者に伝える必要があります。そうでなければ、「うまくやらないきゃ」という義務感ばかりが芽生え、緊張が余計に増すことになりかねません。

僕が、小学生を相手にアイスブレイクをするときには、いつも「声と身体で遊ぼう」と言います。「声で遊ぶ、身体で遊ぶってどういうことだと思う?」「どうして声と緊張する場面のほうが多いのです。でも、実は、声を出しながら走っているときというのは、身体的には余計な緊張がない状態なんです。だから、声を出しながら鬼ごっこをすることで、「声を出しているけれども、余計な緊張のない身体」を無意識に学ぶというレッスンも含んでいるんです。

――高学年ではどうでしょうか。

そうだなあ。じゃんけんをして、勝った人の後ろに負けた人が列車のように連なっていくというものがあります。前の人の肩に手をかけてね。そして、先頭の人は、じゃんけんをする相手を探すときに必ずあるステップを踏むようにする。片足でケンケンしてもいいし、うんとガニ股でもいい。後ろに連なる人はそれと同じステップでついていく。初めに、先生がいくつかのステップの例を見せておいてあげるといいですね。

それで、最後は、全員が連なった一つの長い列ができるので、全員で同じステップを踏みながら教室を一周する。これがクワイマックスです。これは、少し複雑なステップができるほうがおもしろいので、高学年がいいかなと思いますね。

大切なのは、こういうちょっとしたゲーム

アイスブレイクは、

自分が楽しみ、周りが楽しみ、
楽しく始まり楽しく終わればいい。



身体で遊ぶんだと思う?」って。立派な答えは出てこないかもしれない。でもそれがかまわない。「それってどういうことだろう」と考えてくれればいいんです。

「声と身体で遊ぶと、魅力的な人間になるらしい。じゃあ、最初にちよつと遊ばせ」と言つて、アイスブレイクを始める。そこまで時間をかける必要はなくて、ちよつと言葉をかけるだけでずいぶん違います。それと、ここでも大事なものは、楽しそうに言うことです。まず自分が楽しまないね。

――例えば、どのような活動・ゲームがあるのでしょうか。

簡単なものだったら、参加者どうしで声を掛け合つて、順番に並んでもらうというゲームがありますね。並ぶ順番はこちらが決めます。名前の五十音順でも、誕生日順(二月一日から)でもなんでもいい。自然

とにかく楽しむ

――ルールがシンプルで、誰でも難なくできそうな活動が多いんですね。

子どもたちが楽しいと思えたら、それ以上の上のことはありませんからね。アイスブレイクで大事なものは達成度ではありません。一人一人のレベルで成長していけばいい。正解がどこかにあつて、それを求めるようではいけない。「もし正解があるとしたら、それはあなたが楽しむことなんだよ」ということではないんですから。うまくでき

とやり取りが生まれます。

それから、僕がもし低学年と遊ぶとなつたら、「手つなぎ鬼」をするかな。鬼にタッチされたら手をつないでいく鬼ごっこで、手をつないだ人数が四人になったら、二人ずつに分裂させます。そしてそれを、歌を歌いながら行うようにする。タッチされた人は、鬼が歌っている歌と一緒に歌いながら、他の人を追いかけるようになります。もちろん、歌でなくてもハミングでもいい。四人から二人に分裂したときには、分裂した側の組の、先にタッチされた人が別の歌を決めて歌う。組の数だけ、歌が広がっていくんです。

もし、歌でうまくいかないようなら、好きな言葉を一つ決めて、それを声に出し続ける。「アー」や「イー」でもいいですね。ともかく、声を出すことに意味があります。日常、声を出すときつて、スピーチなど、

なくても、それすらも楽しいという感じがします。

先生が助け舟を出してあげてもいいですね。少しアドバイスをしてあげるだけでも、ずいぶん楽になるかもしれません。それができれば、目的達成です。学年初めの四月だけでなく、その後も折に触れ、アイスブレイクの時間を取り入れていくといいのではないのでしょうか。四月はしんどくても、九月ぐらいになれば、もつと気楽に取り組めるようになると思います。

そうしてなんでも言える場を作つて、考えが違ふ者どうし折り合いをつけるという生きた知恵、つまりコミュニケーションの力を伸ばしていつてもらいたいですね。

――ありがとうございました。



こう しみょう じ
鴻上尚史

1958年、愛媛県出身。早稲田大学法学部卒業。1981年に劇団「第三舞台」を結成。以降、作・演出を手がける。「スナフキンの手紙」(94)で岸田國士戯曲賞を受賞。現在は、[KOKAMI@network]、若手俳優を集めて旗揚げした「虚構の劇団」での作・演出を中心に活動。著書に「コミュニケーションのレッスン」(大和書房)、「演技と演出のレッスン」(白水社)など。桐朋学園芸術短期大学教授。

新しい教科書 が 教室に届くまで

教科書がどのように作られ、全国の子どもたち、先生方のもとに供給されるのか、ご存じでしょうか。新しい教科書の完成まであとわずか。教科書が生まれ、教室で使われるまでの道のりをご紹介します。

イラスト：うつみのりこ

供給の約4年前

編集会議 (基本方針の決定)

編集委員会が発足し、教科書編集がスタート。「どんな子どもになってもらいたいのか」という、目ざす子ども像から始まり、

- どんな教科書にするか。
- どんな教科書が求められているか。
- どんな教材を載せるか。
- どんな構成にするか。

について、学習指導要領に照らして時間をかけてじっくりと話し合い、新しい教科書で何を目ざすのか、その基本方針を決めます。



教材探し・ 教材作り

図書館・書店、各種の講演会など、あらゆるところにアンテナを立てて資料収集や取材を重ねます。発達段階を考慮しながら、主に、教材として取り上げるのにふさわしいものを探したり、テーマや題材を決めて作家や研究者の方に原稿依頼をしたりする段階です。



教材探し・教材作りと教材の審議は、何度も何度も繰り返し、時間をかけてよりよい教材を求めています。

編集会議 (教材の審議)

例えば次のようなさまざまな観点から、教材をじっくりと慎重に審議します。

- 興味・関心がもてるか。
- 内容が理解できるか。
- 人権などの視点から問題はないか。

PICK
UP

説明文の教材探し・ 教材作り

光村図書の説明的文章は、全て、さまざまな分野の専門家が子どもたちのために書きおろしてくださったものです。実は、子どもにも分かるような表現や構成が、この短さの中に整えられた文章は、現実にはなかなかありません。どれもが、身につけさせたい国語の力も見据えながら、筆者と編集委員会が何度も何度もやり取りして練り上げた文章です。

さらに、話題・題材は、発達段階に応じた多様なものを取り扱っています。それは全て、筆者が前向きに生きたり探究心をもって関心のあることに取り組んだりすることから生まれたものです。子どもたちは、題材だけでなく、筆者の考え方や姿勢からも、人間の生き方について学びます。行間にはじむ筆者の情熱は、子どもたちだけではなく、先生方をも引き付ける力を持っているのではないのでしょうか。

紙面作り・ 素材集め・ レイアウトなど

1冊の本としてのページ割りを考え、ページごとに紙面構成を決めていきます。その後、挿絵や図、写真などの素材をそろえ、レイアウトを確定します。

- ページ割り
- 文字部分の原稿確定
- 挿絵依頼・図版作り
- 写真探し・写真撮影
- デザイナーとのやり取り
(レイアウト)



デザイナーとのやり取り



写真探し

編集会議 (教材構成の審議)

発達段階や学習の積み重ねを勘案し、教材の構成を考えます。

合格通知

(検定決定)

検定に合格後、教科書
番号が示されます。

修正意見提出

意見がついた事項に
ついて、修正を加え
て再提出します。

検定審査意見 通知

審議の結果が文部科学
省より通知されます。
修正すべき点について
意見がついた場合は、
どのように修正するか
を考えます。

印刷所へ

(確定原稿)

確定した原稿を印刷所へ渡し、
印刷用のデータを作成します。
誤りがないよう何度もやり取り
しながら校正・校閲を重ねます。

- 校正・校閲
- 印刷

供給の1年前

「見本本」完成

検定意見の他に、申請本から修正すべき点を
修正します。修正にあたっては、文部科学省
に再度、書類を申請します。許可が出たら、
印刷・製本し、表紙もついた「見本本」が完
成します。教科書採択の際には、見本本をも
とに教科書の内容を判断していただきます。

採択

どの出版社の教科書
を使うか、採択が行
われます。

供給の約2年前

検定審査提出

(申請本)

教育基本法や学習指導要領に照らし、
教科用図書（教科書）としての基準
を満たしているかどうか、文部科学
省による審議が行われます。

「供給本」完成

実際に子どもたちの手に渡る
教科書のことを「供給本」と
よびます。最終点検後、採択
によって確定した児童数分の
供給本を印刷・製本します。

検定審査提出用 「申請本」完成

文部科学省による教科書検定の提出用の本を
「申請本」とよびます。公正な審議のため、
申請本には出版社名を入れず、白い表紙で提
出しますが、中身はもちろん完成品です。

供給

全国の学校の教室へ

完成した供給本は、全国の特約書店を通し
て、学校に配本されます。新しい教科書が、
ようやく子どもたちのもとへと届きます。

達富洋二

京都市生まれ、長崎県五島列島の公立小学校教諭、大阪教育大学附属小学校教諭、京都教育大学附属小中学校教諭等を経て、現職。博士（文学）。共著書：「国語授業の新常識」「読むこと」「シリーズ、国語教育の新常識」これだけは教えない国語力（ともに明治図書）など。

「コミュニケーションコラム」の活用

日々、子どもたちを教える先生方が抱えるお悩みの中から一つを取り上げ、解決のためのアドバイスを掲載するコーナーです。
今回は、達富洋二先生と吉永幸司先生にご登場いただきます。

お悩み

教科書三年以上の各学年にある「コミュニケーションコラム」の生かし方を教えてください。「話すこと・聞くこと」教材との関連のさせ方、授業での配慮をどう行えばよいでしょうか。



「コミュニケーションの力と」「話すこと・聞くこと」の学習にはどのような関係があり、「コミュニケーションコラム」の意義をどのように考えればよいでしょうか。

解決
のために

1 自分の経験を想起・自覚し、
「コミュニケーション」の予想と心積もりができるようになります。



佐賀大学教授
達富洋二

「話す・聞く」学習と一体化して

「コミュニケーションの力と」「話す・聞く」単元の学習と一体化して育んでいくことが大切です。なぜなら、その育成には、次の三つの力が必要であり、これらは、「話す・聞く」学習を通して、より着実に身につくものと考えられるからです。

- ① 語彙や音声などの言語的な力
- ② ひとまとまりの話（話し合い・談話・討議など）を、相手と一緒につくりあげるための文脈的な力
- ③ 自分の考えをもってコミュニケーションの場面に関与していきこうと主体化する力

ただ、身につけた力を実際の場で運用し、うまく働くかどうか確かめ、さじ加減を知ることも重要です。そのため、力の定着のためには、実際のコミュニケーションの場面で働かせてみる必要があります。

実際の場での「コミュニケーション

しかし、実際の場では、「コミュニケーション」がうまく成り立たないこともあるはず。日常の「コミュニケーション」というのは、やり取りする内容の一部始終をあらかじめ把握してから始めるものではなく、相手とのやり取りを通してつくりあげていくものです。ですから、その参加者は、「コミュニケーション」を取りながら、やり取りしている内容がこの先どうなっていくかを予想する必要があるのです。

やり取りの内容がそれぞれに異なる実際の場では、それまでの自分の経験を想起することが求められます。過去の「コミュニケーション」の場面の状況自分の関わり方が、判断の手助けとなるからです。そのため、「コミュニケーション」に関する経験、自分の参加のしかたを、折に触れ自覚しておくことが重要といえます。

「心積もり」を可能にする「コラム

「コミュニケーション」は、人間関係を構築し、切りひらいていくものです。上達には、「心地よさをつくる」という心積もりができるようになることもまた有効です。「コミュニケーション」の型を知り、それを使いこなして自分のものにすることで、その心積もりが可能になります。

そこで、活用したいのが「コミュニケーションコラム」です。紙面から具体的な「コミュニケーション」の場面を想像することで、自分の経験を想起し、自覚させるのに適した教材といえます。とりわけ中学年では、挿絵と吹き出しが効果的に用いられ、より場面の状況が想像しやすくなっています。

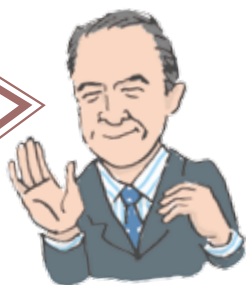
本コラムはまた、教室での心地よい関係づくりにも働くはず。話し・聞く」学習や実際の場と行き来しながら、「コミュニケーションコラム」を有効に活用していきたいものです。

実際に授業を行ううえで
配慮・意識しておきたいことについて
挙げていただきます。

解決
のために

2

「コラムの内容を理解したら、
日記を書くなどして、学習と生活をつなげるようにしましょう。」



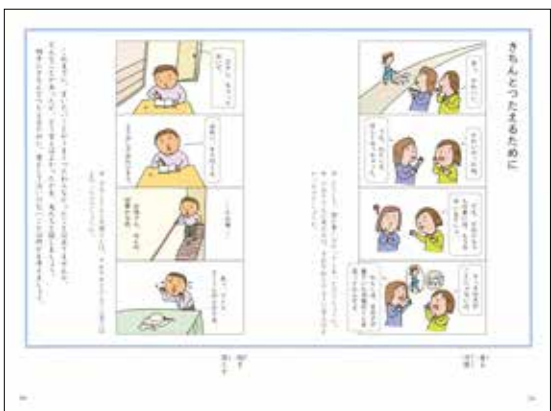
京都女子大学教授
吉永幸司

「国語が大事」と思う子に

子どもたちが、「国語で勉強したことが役に立った」「国語で勉強したから成長できた」という気持ちを持ち、国語を好きになってくれたらと思っています。そのために重要なのは、授業が楽しく分かりやすいこと、そして、習得した力が日常の言語生活の向上に役立っているという手応えを子どもたちに感じさせることです。「コミュニケーションコラム」は、この二つの要件を満たしているといえます。「きちんとつたえるために」(三年上)を例に、考えてみましょう。

「コミュニケーションコラム」の意図

「きちんとつたえるために」は、見開き二ページ、漫画の形式で構成された親しみやすいコラムです。日常生活で誰もが経験するような、言葉による誤解や行き違いに気づかせ、正しい使い方を習得させることを意図したものです。よい教材であるのに、息抜きとして軽く読んで終わるという扱われ方も多いような気がします。しかし、学習の出口を「言語生活の向上」に置くと、言語に対する子どもたちの意識が変わる力をもった教材です。ここではその力を引き出すべく、取り立てて扱った授業例をご紹介します。



「きちんとつたえるために」(3年上P34・35)

授業の展開例

(1) 教師が事例を集める。

日常生活で言葉の食い違いや言い間違いがうまく伝わらなかった事例を集めます。「明日、公園で遊ぼう」と約束をしたが、時間を決めなかったので困った、「大事な本だからすぐに返してね」と言ったのに、なかなか返してもらえなかったなど、さまざまなのが考えられます。

(2) コラムを活用して授業をする。

▼ 導入

(1)の事例を使って、「困ったこと」のクイズをし、きちんと伝えるための学習への関心を高めます。例えば、公園で相手を待って困っている子の絵を見せ、その理由を考えさせるといった方法が挙げられます。

▼ 展開

教科書の事例を見て、状況やその原因について考えます。ここでは、グルー

プで話し合い、きちんと伝えることの大事さを確かめることが重要です。場面を演じることで、内容を理解するという方法も考えられるでしょう。これらの学習活動を通して、コラムの意図である、①どう言えばよかったか、②相手にきちんと伝えるために落としてはいけないことを理解させるのです。

▼ 終末

「()をはっきり伝える」という形で学習内容を整理します。()内に入る言葉として、主語・場所や時間・伝えたいことなどが考えられます。

(3) 日記を書く。

学習したことを授業で完結させず、自分の生活づくりにつなげるため、一週間、「きちんと伝える」を題材とした日記を書かせます。条件として、きちんと伝えることを意識した出来事を書くことにします。日常では、うまくいくことだけでなく、トラブルも起こるはず。それを、きちんと伝える

ことを意識させる好機とし、どのようにすればよかったか考える過程・考えたことを日記に書かせるのです。三年生はこうしたトラブルが多い時期です。題材に困ることはないでしょう。

この時期の子どもたちの集中力を鑑みると、「きちんと伝える」という意識を高めるには、一週間という期間が適切だと考えられます。一週間、集中して考えることで、その後も「きちんと伝えていきますか」という言い言葉が通じる子どもやクラスに育っていきます。さらに、「国語で勉強したから成長できたね」と言葉をかけ、国語の学習が生活に役立っているという自覚を促すのもよいでしょう。

「コミュニケーションコラム」は、二ページの手軽な構成に見えますが、奥が深い教材といえます。子どもたちが、自分の言語生活を見つめることに資するような、授業での活用を考えていきたいものです。



よしなが
幸司

滋賀県生まれ。滋賀大学教育学部附属小学校教諭、同副校長、公立小学校校長を経て、現職。京都女子大学附属小学校校長。著書に「日本語の力がのびることはあそび」(ポプラ社)、「子どもが育つ学校現場の京女式はめはめ言葉」(小学館)など。光村図書 小学校 国語 教科書編集委員を務める。

「その悩み、解決します！」は今号が最終回となります。「愛読ありがとうございます」

並行読書を活用した「ウナギのなぞを追って」(四年下)



並行読書とは

今回は、並行読書を取り入れた授業の教材研究について考えてみましょう。教材は、四年下巻の説明的文章、「ウナギのなぞを追って」です。本論に入る前に並行読書とは何か、その目的について少し触れたいと思います。

並行読書とは、国語科の授業と並行して、その教材の内容や単元のねらいに即した図書を目的に読む活動を指します。今、国語科の授業と日常の言語生活の意図的なコラボレーションとして注目されています。

では、なぜ、このようなコラボレーションが必要なのでしょう。言語力の向上に、学校教育における国語科の指導が大切なのもちろんです。しかし、その一方で、子どもたちを取り巻く言語環境の影響を見逃すわけにはいきません。

私たちは言語に囲まれて生活し、言語

単元の位置づけを確認

それでは、いつものように教材研究をしていきましょう。文章は、大きく三つのまとまりに分かれています。「初め・中・終わり」の構成といえます。タイトルは、刺激的です。なにしろ「謎解き」なので、子どもたちの興味をいやがうえにもかき立てます。

単元名は「科学読み物をしようかい

並行読書が、一般にいう自由読書と異なるところは、「目的

的」という点にあります。学習指導要領の「読むこと」

の内容には、「目的に応じた読書に関する指導事項」(カ)が掲げられています。どの発達段階でも、目的的な読みが求められているのだといえます。



※1「ウナギのなぞを追って」冒頭ページ(P74)

しよう」(※1)。教科書で想定されている身につけさせたい力は、「事実と考えるの記述に気をつけて調査の道筋を読むこと」「興味をもったところを中心に、文章を要約すること」です。

さて、ここで忘れてはならないのは、本単元に位置づけられた言語活動が「科学読み物を紹介する」であることです。単に、ウナギの謎について理解する、教材文を正確に読み取ることです。

単元との出会い

「科学読み物を紹介しよう」
関心のある科学読み物を探して読み、それを互いに紹介し合う活動をしよう。

第一次

○自分たちの周りを取り巻く多くの不思議な謎の存在に気づき、関心をもつ。
・題名読み
・ブックトーク(教師による本の紹介)
・興味をもったことを中心に要点を整理して紹介の文章を書く方法を学ぶ

第二次①

○謎の解明に取り組む人々が活躍し、成果を出していることを知るとともに、興味のある本を選ぶ。

・教材文「ウナギのなぞを追って」を読み、内容を理解する
・教材文の読みと並行して、自分の選んだ本を読み進める
○調査・研究の結果を分かりやすくまとめた教材文の記述から、表現の特徴やまとめ方の工夫(根拠の示し方や構成、図・写真の取り入れ方など)をつかむ。

第二次②

○教材文を使って、紹介の文章を書く。

第三次

○「ウナギのなぞを追って」の紹介の文章を参考にして、自分が読み進めてきた本を紹介する文章を書く。
○それを互いに紹介し合って、不思議な世界の謎解きを楽しむ。

※2指導計画例

いうわけではないのです。教材文を読んで獲得した力を、自分の目的に応じて活用する力(類似した読み物を読む力)を育成することが求められているのです。学習指導要領「読むこと」(第三学年及び第四学年)には言語活動例として、イ 記録や報告の文章、図鑑や事典などを読んで利用すること。

ウ 記録や報告の文章を読んでまとめたものを読み合うこと。

エ 紹介したい本を取り上げて説明すること。

が示されています。こうした活動を通して、指導事項、身につけさせたい能力を育成するわけです。つまり、本単元は「私の選んだこの科学読み物を、友達や先生に紹介するのだ」という子ども視点の活動目標(ゴールイメージ)をもたせ、「そのために、教材文でしっかり力をつけるのだ」という主体的な学びを引き出すつくりになっているといえます。それを踏まえて考えたのが、指導計画例(※2)です。

教師による本の紹介 ―ブックトーク―

子どもたちは、本単元を学習するまでにいくつかの説明的な文章を読んだ経験があります。そうはいっても、単元の導入段階で、科学読み物とはどんな文種のものか、具体的にはどのような本があるのかを示すことは、子どもたちの意欲を高めるために効果的です。そこで行いたいのが、本の紹介、つまりブックトークです。

教科書P84の「本は友達」(※3)には、「本を読み、筆者とともに生き物のなぞにせまみましょう」として、五冊の科学読み物が紹介されています。これらを取り上げるのもよいでしょう。こうした本は、できれば複数冊用意して子どもたちの興味・関心に十分応えたいものです。そのためには、本の計画的な購入や地域図書館との連携、学校図書館の司書や図書館ボランティアに協力を求めることが有効です。教科書P122～125の「この本、読もう」も大いに参考になるでしょう。教師によるブックトークの場合、紹介

する本は、内容だけでなく、構成や記述のしかたについても、単元の目標に沿ったものであるほうが、学習効果が上がります。意図的に選書することによって、ブックトークをより効果的な時間にしたいものです。

そのためには、教師が日頃からさまざまな文種の本を読んでおくことが大切です。自分の興味や関心を意識的に広げることです。また、子どもたち自身に本と



※3「本は友達」(P84)

出会う喜びや、本を探したり選んだりする楽しさを味わわせるには、学校図書館の活用が有効でしょう。ともかく、教師自身が学校図書館の蔵書に興味をもち、普段から足を運ぶことを勧めます。指導目的や児童の実態、学校・地域の状況に応じた読書の扱いを工夫してみましょう。ブックトークを行う時期は、

- ・本文の学習に入る前
 - ・本文の学習の途中
 - ・本文の学習を終えてから
- などいくつか考えられますが、単元の指導計画に応じて、最も効果的な時期を選ぶようにします。今回の指導計画例では、単元の言語活動に合わせ、早い段階から並行読書始める構成としました。
- いずれの段階から始めるにしても、関連する本を子どもたちの手が届くところに常備するなど、言語環境・図書環境は普段から意識して整えておくようにしましょう。地域図書館や家庭に呼びかけるなどの手立てでも有効です。

教材文の学習にあたって

この授業では、教材文を使って、「自分が読んだ科学読み物の内容や自分が受けた感動を、相手に分かりやすく伝える表現方法(事実と感想・意見を明確に区別して伝える、要点に注意して読み、必要な部分は要約・引用して伝える、紹介の文章)」について理解させます。そして、それらを活用して、今度は自分が選んだ本を紹介する文章を書かせます。

第二次、教材文から学ぶ段階では、
・どのようなことに着目して読めばよい
か。

・どんな項目や視点でまとめれば相手に
分かりやすく、興味・関心をそそる
紹介の文章になるか。

について、子どもたち一人一人に、自
分の目的意識をもたせたいので、文章
に向き合わせましょう。

時間の確保

並行読書の時間設定についてはいろい
ろな実践報告があります。

学校や学年で「朝読書」の時間が定着している場合は、その時間を使います。あるいは、全て課外で進める方法もあります。家庭での読書です。その場合も、どんな本を選んでいるのか、一人一人の選んだ本を教師が把握しておく必要があります。選書に迷う子や目的とかけ離れた選書をした子には、本の候補を具体的に挙げるなどの指導が必要です。さらに、ときどき進捗状況を確認し、励ますなどしたいものです。

初めて並行読書を経験させる場合には、単元の指導時間の中に組み込み、適宜、指導しながら進めることも有効です。毎時間の授業の始まりや終わりに読書タイムを盛り込む方法です。いずれにしても、キーワードは**目的的に読む**ことです。

自分が選んだ本を並行読書しながら、「ウナギのなぞを追って」を学習すること、子どもたちは次のようにさまざまに感想をもつことでしょう。

「図・絵・写真・地図・表などがたくさん使われている。私の選んだ本でもそうだった」

「研究の第一歩から、七十年以上の歴史が年代別に書いてある。僕の選んだ本にも謎を解く経過が詳しく書かれていた」「レプトセファルス誕生の場所や日時を予想して調査している。私の選んだ本も調査結果から予想を立てているところが似ている」

こうした反応は、目的的な読みの力を育てます。

子どもたちの活字離れへの対策として、多くの学校が、読書の時間の確保に力を入れるようになりました。しかし、物語に比べると、まだまだ科学的な読み物への関心は低いようです。科学の分野は日進月歩。魅力的な本が多く出版されています。何よりも、未知に挑む勇氣、謎を解き明かす知的興奮。事実の蓄積が確かな予想・仮説へ、その仮説を立証するための実験・観察・調査・分析、さらにその結果がもたらす新たな疑問や謎……。教科書にある科学読み物を、子どもたちの不思議発見の入り口として大いに活用したいものです。

2

デジタル教科書の活用

広島県尾道市立向東小学校教頭

藤井浩治



授業のねらいを達成し、児童の思考力・判断力・表現力を高めていくためには、多様な教材について指導方法を工夫することが望まれます。今回は、デジタル教科書の活用について、具体的な授業の進め方を示しながら提案したいと思います。

はじめに

教育の情報化に関する政策に伴い、各学校への電子黒板等の整備が進み、地上波デジタル放送への移行から、多くの普通教室にデジタルテレビが配備されるようになりました。これにより、以前に比べて、授業でデジタル教科書を活用することができるようになります。

書写は、文字の部分や点画の組み立て方を「視覚的」に考えたり、確かめたりする場面が多い教科です。その意味でも、

デジタル教科書の活用によって、より授業を改善できる可能性のある教科だといえます。そこで、今回は「書写デジタル教科書」を活用した授業の例をご紹介します。

2 原理・原則を
発見させる

例えば、算数の授業で、公式を先に教えてしまつては、児童の思考力を高めることにはなりません。書写の授業におい

ても同様です。文字の原理・原則を児童に発見させるプロセスの中に言語活動を設定することで、自らそれを発見した驚きと喜びから、児童の文字に対する関心・意欲を高めることができるのです。

原理・原則を発見させるという視点での授業を考えてみましょう。

(1) 画の接し方

▼「画の接し方」の原理・原則

教科書四年に、「点画の組み立て方を考えて書こう」(P8)という単元があります。ここで児童に身につけさせたいの

は、「画の接し方」の原理を理解し、原則を日常の場面で活用する能力です。

図1のように、「□」(四角囲みの部分)の中に点画がない場合、二画目「折れ」と三画目「横画」が連続することから、次の画へと速く連筆するために「折れ」

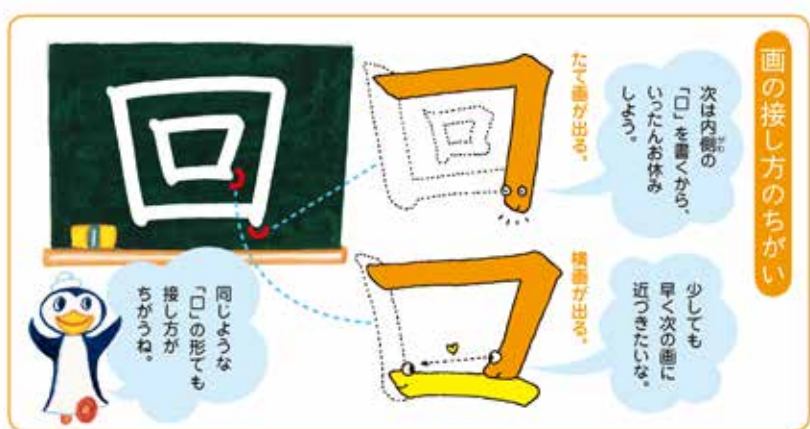


図1 「画の接し方のちがひ」(『書写』教科書4年P8より)。

の縦画が少し内側に倒れ、横画が出ます。これが、「画の接し方」の原理です。

そして、「画の接し方」の原則とは、「□」の中に点画がない場合は最終画が横に出て接し、「□」の中に点画がある場合は縦画が出るように接するということです。

▼漢字カードを使用して

「画の接し方」の原理を理解させ、原則を活用する能力を育成するためには、教え込みの授業からの脱却を図りたいものです。そこで、私は、児童に原則を発見させる工夫として、漢字カードを活用しています。

まず、図2-1のような「足」のカードを見せて、「丸で囲まれた部分の接し方では、二画目の縦画が出るでしょうか。三画目の横画が出るでしょうか。それぞれ、挙手しましょう」と発問をします。カードの裏には、正解を書いておき(図2-2)、裏返して正解を確認します。

次に、図3-1のような「国」のカードを提示して発問し、裏返して正解(図3-2)を示します。

それから、同様にして「目」「石」「口」「日」「田」「古」、計八枚のカードについてクイズのように楽しみながら、それぞれに「横チーム」と「縦チーム」に分類



図3-1



図3-2



図2-1



図2-2

し、板書します。そして、「横チームに共通していること、縦チームに共通していることは何でしょう」と発問します。児童は、「分かった! 横は、『□』の中に点画が何もない」「『□』の中に点画があるのが縦だ」と、原則を発見していきます。

▼デジタル教科書のツールを活用して

このような漢字カードの使用は、どうしても準備に手間がかかってしまうため、できれば教科書を使って授業を展開したいところです。しかし、教科書には、当然、原理・原則の答えが書かれてしまつています。そこで、デジタル教科書の出

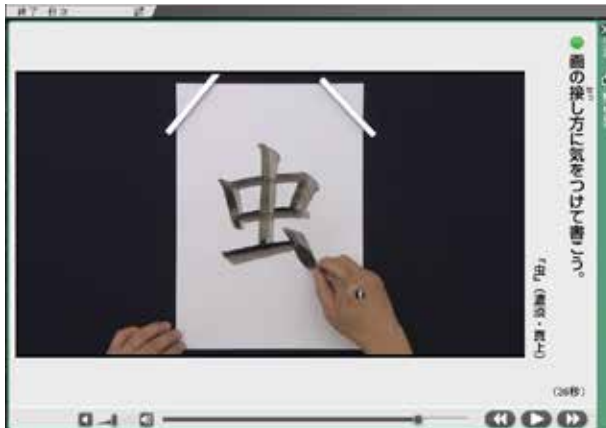


図6

「則ができたのでしよう」

(こ)で、拡大機能を使い、原理が書かれている部分を拡大提示する。(図5)

児童「あ、そうか！ だから、『画の接し方』の原則ができたんだね」

デジタル教科書は、このように強調したい部分を拡大提示するときにも活用できます。

▼デジタル教科書の動画を活用して

「画の接し方」の原理・原則を発見し、



図7 「店」の組み立て方(『書写』教科書5年P18より)

理解したところで、教材文字である「虫」を、毛筆で大きく書いて確かめます。

デジタル教科書には、教科書の教材文字を執筆された先生による、毛筆教材執筆の動画資料が収録されています。

①書字動作を横から見た動画（筆圧が分かりやすい）

②正面から濃淡が分かる墨で書いている動画（穂先の通り道や接し方が分かりやすい）（図6）

③正面から濃い墨で書いている動画（字形が分かりやすい）

の三種類が用意されているので、確認したいことによっての使い分けが可能となります。これを使って、次のように授業を展開していくことができます。

(2) 「たれ」の組み立て方

▼「たれ」の組み立て方の原理・原則

教科書五年に「文字の組み立て方と穂先の動きを確かめよう」(P18)という單元があります。ここでは、「たれ」の組み立て方についての授業を考えてみたいと思います。

「たれ」の組み立て方の原理は、図7のように、「たれ」の中の部分を文字の中心と合わせると、「たれ」とぶつかってしまつたため、少し右に寄せるといふことです。そして、原則は、「たれ」の中の部分（「占」）を、文字の中心よりも少し右にずらすということです。

番です。

「書写デジタル教科書」では、図4のように、書き込みツールの四角枠を使って、教科書の一部分を隠すことができます。これにより、原則の答えである部分を隠して提示することができ、前述と同じような展開が期待できるでしょう。

教師「今日の授業は、画の接し方について学習します。みんなで一斉に言ってみましょう。」

教師「今日の授業は、

画の接し方につ

いて学習します。

みんなで一斉に

言ってみましょ

「う」

児童「画の接し方」

教師「口」と「田」を見てごらん。丸

で囲んだ部分の接し方が異なっているね。どのように異なっているかな」

児童「口」は横画が出て接して、「田」

は縦画が出て接している」

教師「下の漢字を見てみよう。『足』と

「中」は横画が出ていて、「国」と「貝」

は縦画が出ているね。横画が出て

いる漢字に共通していること、縦画が出ている漢字に共通していることは何でしょう」

の『』の中には、横画や縦画が

「中には何も無いよ」

教師「正解です」

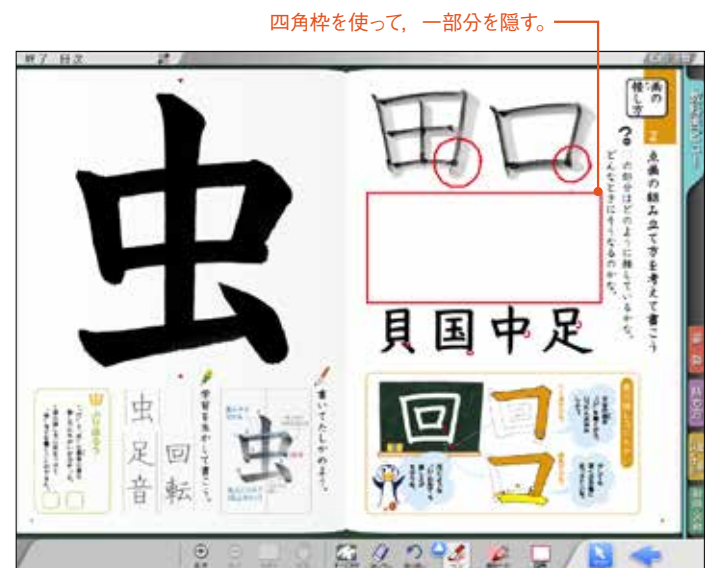


圖 4



図5

3 姿勢と執筆の定着

姿勢・執筆の定着は、書写の学習の基礎・基本として重要な指導事項であるとともに、定着が難しいものの一つでもあります。定着を図るため、鉛筆の持ち方や姿勢について示した図が教室に掲示されているのをよく目にします。これは、児童には、言葉で指導するよりも、視覚的に指導するほうが、効果が高いためです。

「書写デジタル教科書」には、横から

4 用具の取り扱いの徹底

書写の授業は、用具の準備や片づけに時間がかかってしまうことが多々あります。特に、三年生で初めて毛筆書写の学習が始まったときには、準備や片づけの定着が急務となります。

しかし、教師による指導を毎時間繰り返して徹底させることは、現実的には難しいものです。「書写デジタル教科書」には、用具の準備のしかた・片づけ方に

「書写デジタル教科書」を活用した授業の展開例をいくつかご紹介しました。冒頭でも述べましたように、視覚的に示すことで、児童の思考や理解が深まり、知識・技能の定着が期待できます。

また、動画資料は、書写指導に苦手意識をもつ教師にとって心強い味方となります。そして、授業の工夫・改善のアイデアが出てくるのは、その苦手意識から解放されたときなのではないでしょうか。書写動画などの資料は、学習指導書にも付いていますので、活用してみるとよいでしょう。

ツールを使い、図10のように、教材文字に枠や線を書き込んで提示します。ペンやマーカーの色や濃さ、太さは自由に設定ができます。「たれ」を赤い透明マーカーで、中の部分を青い透明マーカーで囲み、「たれ」の中心を赤いマーカーで示しました。もちろん、児童にも、同様に教科書に鉛筆等で書き込みをするように指示します。

色を使って視覚的に分かりやすく提示することで、押さえるべきことを全員で共有でき、児童一人一人の書き込みの作業が確実となります。

見た姿勢と正面から見た姿勢の動画資料が収録されています。①足と足の間を少し空けて、足の裏を床に付けること、②背中を伸ばすこと、③背中をいすに付けず、おなかを机に付けないこと、④利き手の反対の手で紙を軽く押さえること等、書くときの姿勢のポイントを説明したものです。

また、筆記具の持ち方についても、毛筆・硬筆ともに、気をつけるポイントについて動画で確認できるようになっています。繰り返し見せることで、効果的に、児童への定着が図れるものと考えられます。

5 おわりに

「書写デジタル教科書」を活用した授業の展開例をいくつかご紹介しました。冒頭でも述べましたように、視覚的に示すことで、児童の思考や理解が深まり、知識・技能の定着が期待できます。

また、動画資料は、書写指導に苦手意識をもつ教師にとって心強い味方となります。そして、授業の工夫・改善のアイデアが出てくるのは、その苦手意識から解放されたときなのではないでしょうか。書写動画などの資料は、学習指導書にも付いていますので、活用してみるとよいでしょう。

▼ツール・動画を活用して

「たれ」の組み立て方の原理・原則を児童に発見させるには、図8のように、デジタル教科書の書き込みツールの四角枠を使い、教科書紙面の原理・原則の解説に当たる部分を隠して提示します。

教師「『店』『歴』『病』『屋』の四つの漢字を見てください。いろいろな『たれ』がありますが、全ての『たれ』に共通していることは何でしょう」

児童「四つの漢字は、中に入っている青い部分が全部右に寄っています」

教師「正解です。『たれ』の原則は、『たれ』に収まる中の部分を、文字の中心より少し右に寄せて組み立てることです」

さらに、デジタル教科書には、「たれ」に中の部分（占）がぶつかっているアニメーション（図9）が収録されています。これを児童に提示すれば、視覚的に原理を理解することができます。

▼教材文字に書き込んで

「たれ」の組み立て方の原理・原則を

理解したところで、毛筆教材「草原」を使って、原則について確かめ、定着を図ります。

ここで、すぐに半紙に書かせるのではなく、教科書の教材文字の上から、鉛筆等で原理・原則を書き込ませることが重要です。そうすることで、学習した「たれ」の組み立て方の原理・原則が実感できるとともに、繰り返し意識して書くことが期待できます。

デジタル教科書は、このような場面でも活用することができます。書き込み

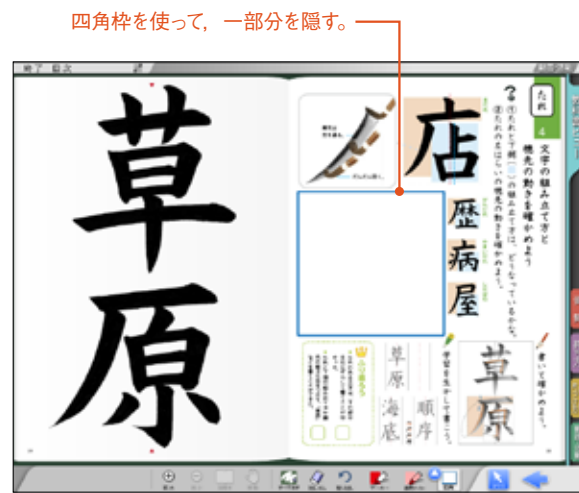


図8



図9



図10



さんぱつやきょうこさん
長谷川義史 作

定価：本体1,200円＋税
ISBN978-4-89528-687-9

世界を舞台にした、中学生リョウたちの
せつなくもきらめく青春物語



リョウ&ナオ
川端裕人 著

定価：本体1,600円＋税
ISBN978-4-89528-689-3

好評発売中！
飛ぶ教室の本

飛ぶ教室

「飛ぶ教室」は、子どもの本と子どもの文化を掘り下げる総合誌を目ざして、昭和56年に発刊した児童文学雑誌です。作家の個性があふれる童話や短編、絵本の書きおろし作品のほか、作家や作品の魅力に迫るインタビューや座談会など、読みごたえある企画満載です。

定価：本体952円＋税
年4回発行
(1・4・7・10月の25日)

1/25
発売



第36号
特集「手紙」

光村図書



現在、解体修理中の国宝・東塔から、「千年の釘」が新たに発見されました。
そこで、来夏の特別展にて東塔から発見された釘を特別展示します。本展では、光村図書小学校『国語』教科書5年に掲載の「千年の釘にいどむ」で紹介されている、白鷹幸伯氏が製作した復元釘に触れることもできます。

*小学校での授業用に、白鷹幸伯氏製作の復元釘を無料で貸し出しています。
詳しくは、下記までお問い合わせください。
〒630-8563 奈良市西ノ京町457 法相宗大本山薬師寺
Tel:0742-33-6001 担当：加藤大覺

薬師寺夏休み特別展「千年の釘発見!!」(仮)
平成二十六年七月下旬から八月下旬開催予定



奈良・薬師寺で
「千年の釘」
を特別公開!!



16人のクリエイターが選んだ、新美南吉童話。彼らの手により新たにつくられた本と原画の展覧会です。会場には、現在「ごんぎつね」が掲載されている教科書が一堂に会します。また、特に、「新美南吉教科書クロニクル」として、「ごんぎつね」が掲載されたこれまでの光村図書の教科書が展示されます。

[会期] 2014年1月25日(土)～3月16日(日)
9時30分～17時30分
休館日：毎週月曜日、2月12日、3月11日
[会場] 新美南吉記念館
〒475-0966 愛知県半田市岩滑西町1-10-1

○装画家：尾崎仁美 小林真理 高松ひとみ テッポウ・デジイン。
舟崎克彦 山崎杉夫 山下以登 山福朱実 山本祐司
よしざわようこ
○装丁家：岡本歌織 小川恵子 小林真理 松岡史恵 丸尾靖子
山影麻奈(展示プロデュース)
○ペーパークラフトアーティスト：長尾昌枝

生誕百年記念
イラストレーターと装丁家が彩る、南吉童話
「新美南吉装丁展」開催